山崎郷土研究会報

NO. 104
16.9.15

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話62－2000

目　次

①奈良時代の鏡
瑞雲双鸞八花鏡の起源を探る　片山　昭悟　1
②伊能忠敬測量隊が山崎へ　西川　博敏　8
③大雲寺元禄における
念仏講についての一考察　下村　哲三　13
④長水城五十波構（構の城）　春名　俊夫　17
⑤赤坂太郎と宝篋印塔　谷井　伴夫　19
⑥長水城の伝説七不思議　中川　真里　22
⑦蚕繭紙の寺（大雄院）をたずねて　春名　俊夫　26

奈良時代の鏡
瑞雲双鸞八花鏡の起源を探る

片山昭悟

一、はじめに

私は奈良時代の鏡瑞雲双鸞八花鏡がどのように金谷にもたらされたのか、だれが所持していたのか、なぜ古墳から奈良時代の鏡が出土したのか、紋様はなぜあのような鳥の紋様なのか。なぜ、金谷なのか。

このなぞをとくために平成二年ごろから調査と研究をつづけている。

国内では奈良平城京出土鏡にちかいこと、中国唐鏡をもとに奈良時代に多くつくられたものであること。そして、奈良の坂田寺や五條の霊安寺、南滋賀で十七面が出土したり、伝世している。青銅で十一センチの小型鏡、最も小さい鏡であること、末期に踏み返し鋳造されたものであることがこれまでに確認できた。

中国唐鏡の出土例をみると、西安、洛陽、新郷、南京、海寧など唐代の重要な地点や古代の交通の要衝にあたる。

瑞雲双鸞八花鏡の紋様は、鈕を挟んで二つの鳥が頸に綬帯をつけている。鳥は翼を広げて今にも飛び立たんとしている。想像上の鳥である鸞とされる。鸞は、瑞鳥でめでたい鳥である。綬帯をつけているのは長寿、幸福を願う紋様の意味がある。同心円結びの綬帯の先端は、曲線を描くタイプである。

上方には仙山に雲がたなびいている。たなびいている雲は、ひとすじの雲が四本とその下に垂れ下がる雲の朶雲が二つ。下方に

は花枝にとまり果実をついばむ小鳥が右を向いている。内区と外区を分けるのは、宇宙を表すとされる。界圏の外には飛雲の紋様と花枝の紋様を交互に描く八花鏡である。

瑞雲双鸞八花鏡の紋様の起源は、遠くシルクロードの影響を受けた紋様である。

私は、二〇〇三年九月と十一月に中華人民共和国を訪れ、金谷鏡の起源をもとめて唐の都である西安、中国の首都である北京において唐鏡の出土地ならびに現地調査を行った。

西安では、東郊の長楽坡や十里鋪、韓森寨や郭家灘などの現地を確認できた。また、陝西歴史博物館所蔵の唐鏡については、周天游館長のご厚意で調査ができ、北京では中国国家博物館において保管部關雙喜先生並びに盛爲人先生に唐鏡についてご指導を賜り特別許可を頂き観覧ならびに写真撮影させていただいた。

今回、西安での唐鏡調査の概要報告書として調査結果をまとめたものである。

二、中国唐鏡の調査

シルクロードは私にとって永遠の研究テーマで、「奈良時代の鏡の源流をさぐる」は、ライフワークでもある。

永年シルクロードに是非とも行きたいとの思いが、二〇〇三年の秋九月十九日から二十二日にかけて実現できた。

シルクロードは、長安（現在の西安）にはじまるとされる。西はペルシア、ローマに通じ、東は海を渡れば日本に至る。西安は東西文化のターミナルとされる。一三八五年前に唐の都があったところである。シルクロードは、絹の道で「絲綢之路」とよばれる。

29 地域 奈西　2003年（平成15年）11月12日

藤原房之介

瑞雲双鸞八花鏡

山崎・金谷古墳 奈良期製作

地元の研究者 片山さん

ルーツ西安へ

原型鏡出土の「唐墓」を視察

「絹の道 実感」

宍粟郡広域行政事務組合の埋蔵文化財調査員、片山昭恒さん（35）＝山崎町金谷＝がこのほど、中国・西安を訪れ、同町から見つかった奈良時代の鏡「瑞雲双鸞八花鏡」の原型が出土した長楽坡地域を視察した。

片山さんは郡内の遺跡調査を行い、同鏡と奈良時代の鏡を中心とする八花鏡の追究をライフワークとしている。

これまでの研究成果では、足を使った精力的な調査を行い、同鏡と奈良・平城京跡から出た鏡の共通性などを確認、著書「奈良時代の鏡」で紹介し、高い評価を得た。二年前には宍粟の考古学者に贈られる「藤森栄一賞」を受賞している。

今回の訪問は、片山さんの実績を知る町ゆかりの文化人類学者西江雅之さんらの推薦を受け、メトロポリタン東洋美術研究センター（京都市）の協力で実現した。

現地では同鏡の原型鏡が見つかった「唐墓」を視察。周辺に川が流れ、背景に山脈のある景観は、揖保川に近く後背に国見山がそびえる「金谷古墳」の立地環境によく似ていた、という。

片山さんは「金谷から出た鏡の様式が中国、さらにはペルシャからシルクロードを経由して伝わったことが実感できた」と話し、視察成果を今後の研究に生かしていきたいとしている。

図1　（神戸新聞2003.11.12）

中華人民共和国陝西省西安市の訪問については、メトロポリタン東洋美術研究センター東洋美術研究振興基金の平成十五年度研究助成によるもので、元早稲田大学文学部教授で文化人類学者の西江雅之先生、宮内庁正倉院事務所保存科学室長の成瀬正和さん、奈良文化財研究所飛鳥資料館学芸室長の杉山洋さん、元興寺文化財研究所長の坪井清足さん、長野県の神村透先生をはじめ多くの先生方との出会いにより中華人民共和国へ行くことができ

た。

今回の調査の目的は、

①金谷鏡の起源を探ることで、原型鏡が出土した出土地の現地調査である。

中国唐鏡の調査と紋様の調査から奈良時代の鏡との比較検討を行うことである。

②奈良時代の鏡瑞雲双鸞八花鏡に描かれた想像上の鳥の鸞について、頸にかける綬帯について、朶雲紋、飛雲紋、花枝紋などの紋様が奈良時代にどのようにもたらされたのか。

③奈良の平城京や京の平安京の原型になった唐の都がおかれた長安を訪れ、唐鏡の実見と唐鏡の出土地を自分の目で確認することである。

三、今回の調査結果について

一、金谷鏡の原型鏡が出土したとされる西安市東郊の長楽坡、十里鋪を訪れ、現地で位置が確認できた。

このほか西安市東郊で唐鏡が多く出土している地の韓森寨、郭家灘、王家坎、高楼村、高松塚古墳と同じ鏡が出土した地の十里鋪、独孤恩貞墓も現地確認ができた。

二、陝西歴史博物館（館長周天游先生）では、十五面の唐鏡が調査できた。伯牙弾琴鏡、海獣葡萄鏡、孔子問答鏡、瑞花双鸞八花鏡で南倉三号鳥獣花背円鏡と同タイプの鏡一二七唐鳳銜花鏡など『陝西省出土銅鏡』にみられる唐鏡を幸運にも実見できた。

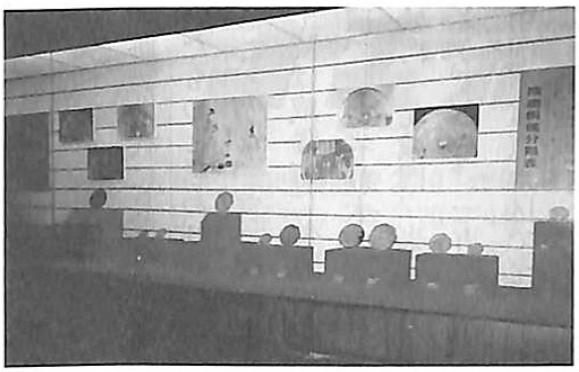


写真１　陝西歴史博物館（唐鏡）

三、唐の都がおかれた長安、現在の西安市の現地を実見できた。

中国の漢、唐の中心地である。中国の内陸部のほぼ中央に位置する。黄河支流の渭河である。南に秦嶺山脈が、東郊には渭河の支流である。滻河や灞河が北流する。白鹿原や銅人原、龍首原、鳳棲原という台地が見られる。

唐墓は、東郊の長楽坡、十里鋪は瑞雲双鸞八花鏡の出土地である。唐墓からの出土である。

韓森寨、郭家灘、王家坎、高楼村の唐墓から唐鏡が出土している。

①東郊には渭河の支流である滻河や灞河が北流する。

②南に山脈がある。秦嶺山脈である。

③二つの川の台地上が白鹿原というところである。

④東北には銅人原がある。

⑤西北には龍首原がある。

⑥三つの原が鼎（かなえ）のように集中する。

⑦シルクロードの出発点で長楽

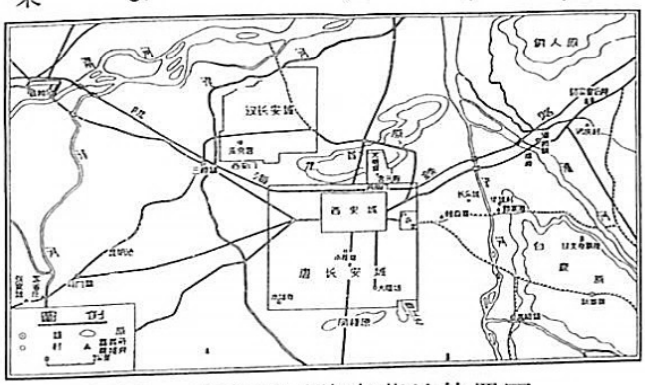


図２　西安郊区隋唐墓地位置図
『西安郊区隋唐墓』1966

坡、十里鋪、韓森寨、郭家灘、高楼村は、洛陽、鄭州へ行く東への交通路にあたる地点であり当時の東西交通大道である。

⑧長楽坡は隋の時には滻坂と呼ばれ、唐の時代に長楽坡と改めている。この地域は墓地に適していたものと思われる。

⑨綬帯を伴った想像上の鸞がみられることから、官吏職の唐墓ではないかと推定される。なお、王陵は咸陽市に位置する。

今の西安市は四〇〇万人を超える人口で陝西省最大の都市である。鐘楼や鼓楼や大雁塔、東城門、南城門、北城門、朱雀門など長安城が残る。唐の時代がそのままのようである。一方二〇〇八年の北京オリンピックを控えて西安も中国の重点地区で至る所で開発が工事中であった。

四、唐鏡出土地の調査ついて

九月二十日早朝より唐華賓館で唐鏡出土地の聞き取り調査をする。唐華賓館は、西安市内の南の大雁塔近くで静かな所である。

フロントの朱薇さん、ベルボーイの呂化さん、曽天金さんの三人より地図をもとに所在地について聞き取り調査を行った。西安市の地元であり、地理に詳しく幸運にもまず金谷鏡の原型鏡が出土した東郊長楽坡、十里鋪が確認できた。

その後、韓森寨、郭家灘、王家坎、高楼村などを詳しくご教示いただいた。いずれも唐鏡が出土した唐墓である。西安の東郊に集中しているようである。

今日二十日には私は秦の始皇帝ならびに兵馬俑博物館に見学することから、行く途中に空海が唐に渡って修行したとされる青龍寺付近も特別に通っていただき、西安の東郊長楽坡や十里鋪を通過すると知らせるとのことであった。唐鏡が出土した東郊の韓森寨、滻河左岸の長楽坡付近、滻河、灞河などの現地を確認できた。

今回の西安市唐鏡出土の現地調査について

①陝西省西安市の現況が現地を訪れて確認できた。

②金谷鏡の原型鏡出土地が確認できた。西安東郊長楽坡、十里鋪である。西安市の東郊で、黄河の支流である渭河に注ぐ滻河の左岸で、自然堤防上にできた台地である。

南には、秦嶺山脈の山々が連なる。長楽坡から十里鋪一帯は、白鹿原と呼ばれる地で付近の韓森寨、郭家灘、王家坎、高楼村からは唐鏡が出土している。西安でも東郊では、隋唐墓が集中して存在していた地点である。地理的環境は、唐鏡の出土地に適した地点である。

滻河と灞河が黄河支流の渭河に注ぐちょうど交わる地点である。北東には銅人原、北西には龍首原と呼ばれる台地が知られる。

今回、西安の唐墓の所在が確認できたことは大きな収穫であったと考えている。

③唐の都長安城を訪れた。周囲が三キロメートルのスケールの大きな城壁が残存している。

長安城は、風水思想に基づいた当時の基本とされる。

奈良正倉院にもつながりのあるシルクロードの出発点である西

門ならびに、北の城壁、鐘楼を見学できたこと、平城京や平安京のモデルとなった長安城も自分の目で確認できたことも今回の収穫であった。

五、中国唐鏡の瑞雲双鸞八花鏡と金谷鏡

中国唐鏡の瑞雲双鸞八花鏡は、双鸞鏡が多くあるなかでも比較的少ないタイプのようである。

先端が渦巻きのような綬帯を頸にかけている双鸞は、唐鏡の中でもわずかの種類である。中国の瑞雲双鸞八花鏡は、これまで十二面出土している。

西安からは二面が出土している。西安東郊の長楽坡と十里鋪から出土している。西安東郊の長楽坡迤西緯十八街からは一九五五年十月に出土している。長楽坡迤はさかになったつつみがななめにつづくところである。金谷鏡の原型とされる唐鏡である。

ほかに洛陽、新郷、鄭州、南京、河北省から出土している。中国では広く分布していて多く見られる。唐代において交通、文化の要衝である。シルクロードの東へのルートでもあり、遣唐使のルートでもある。今においても洛陽、新郷、鄭州、南京は交通の重要な地点である。遣唐使などにより多くの唐鏡が奈良時代に日本に伝わり、瑞雲双鸞八花鏡を原型にして踏み返し鋳造され、それが金谷にもたらされたのであろう。

長楽坡迤西緯十八街から出土した瑞雲双鸞八花鏡は、径が十二・三センチ円鈕葵花式である。

次に日本で出土した金谷鏡や平城京鏡の瑞雲双鸞八花鏡との対比をすると、

①中国唐鏡は面径が十二・三センチ～十二・六センチと大きく長楽坡から出土したものでも径が十二・三センチである。日本で出土したものは、十一・九センチ～十一センチである。約〇・四～一・六センチの開きがある。金谷鏡は日本で出土しているなかで最も小さいもので、十一センチである。中国唐から渡って幾度か踏み返し鋳造されているものである。瑞雲双鸞八花鏡の流通を考える上で極めて重要である。

②銅質が異なることである。中国唐鏡は白銅鏡で、錫が多く含まれているのが特徴である。日本で出土している金谷鏡は銅が多く青銅質の銅鏡である。

③紋様の表出は、中国唐鏡の長楽坡出土鏡は同心円紋の綬帯を頸にかける双鸞や瑞雲が鮮明であるのに対して日本で出土している金谷鏡は双鸞など表出があまい。部分的にみると、瑞

きれいなカラープリントの店

コーエーカメラ Specialty Camera Shop

本店　宍粟郡山崎町東鹿沢 26-3　☎62－2089
フリーダイヤル　☎0120－440－990
ＦＡＸ 0790－62－7429
咲ランド店　ＴＥＬ 0790－63－0533

雲の下に垂れ下がる朶雲紋は、中国唐鏡の長楽坡出土鏡は朶雲の先が細い特徴があるのに対して金谷鏡の朶雲の先は太い特徴があるように思われる。

今回西安東郊の長楽坡と十里鋪の現地を訪れ、金谷鏡の原型鏡出土地が確認できた。西安東郊長楽坡、十里鋪である。西安市の東郊であり、黄河の支流である渭河に注ぐ滻河の左岸で、自然堤防上にできた台地である。

南には、秦嶺山脈の山々が連なる。長楽坡から十里鋪一帯は、白鹿原と呼ばれる地で付近の韓森寨、郭家灘、王家坎、高楼村からは唐鏡が出土している。西安でも東郊では、隋唐墓が集中して存在していた地点である。地理的環境は唐鏡の出土地に適した唐墓の地点である。

金谷鏡が出土した金谷古墳の地点は、「播磨国風土記」の比治里であり、山崎断層で知られる兵庫県宍粟郡山崎町の金谷という地である。揖保川の段丘上で上流域で、大きく蛇行するのが見える。背後には国見山がそびえる。山裾に瑞雲双鸞八花鏡が出土した金谷の古墳がある。周囲は東に揖保川を挟んで川戸山、高所山や、北には篠の丸、長水山、雄棲山の山々が連なる。中国神仙思想に基づいた地形をしているようにも思われる。

六、まとめ

中国西安へ唐鏡の調査で訪れた。今回多くのことを現地調査で学ぶことができた。

一、金谷鏡の原型鏡が出土している地を訪れ、現地を確認できたことである。西安東郊の長楽坡と十里鋪の現地を訪れた。

二、『陝西省出土銅鏡』にみえる唐鏡が出土した位置の調査ができたことである。西安東郊の韓森寨、郭家灘、王家坎、高楼村などの位置である。

三、陝西歴史博物館で唐鏡の調査ができたことである。

四、唐の都長安現在の西安を訪れたことである。当時の国際都市の面影が色濃く残っていたこと。

五、唐代の紋様調査ができたことである。

六、シルクロードの出発点をおとずれたことである。長安城の西門、北門、鐘楼、大雁塔などを訪れた。

西安への現地調査で、今回の成果を今後の奈良時代の鏡研究に生かしていきたい。

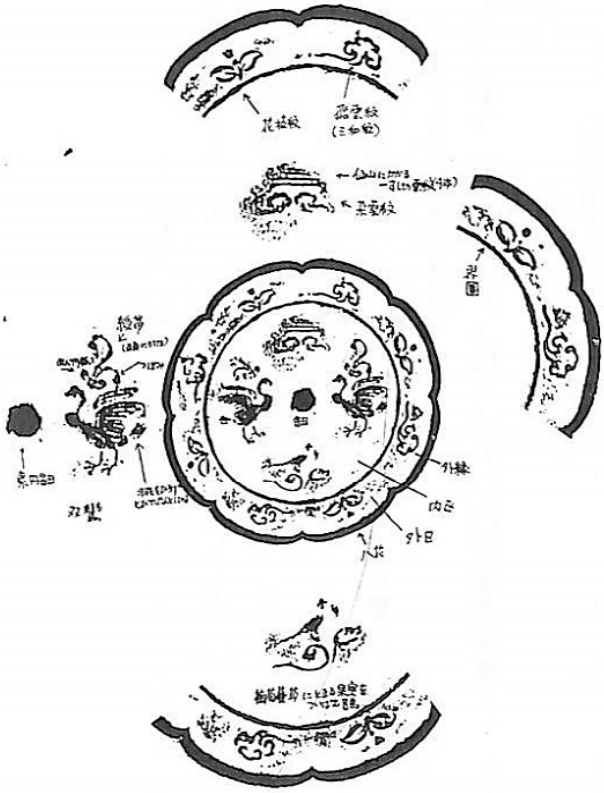


図3　瑞雲双鸞八花鏡

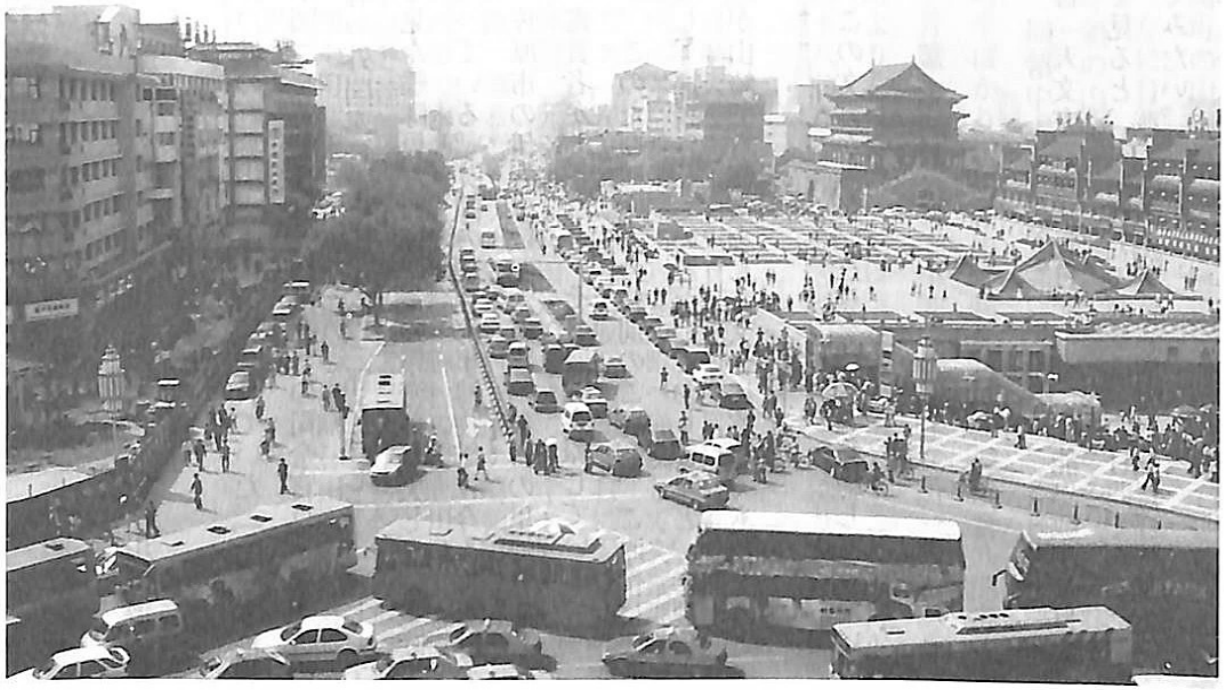


写真２　西安鐘楼より（西を望む）

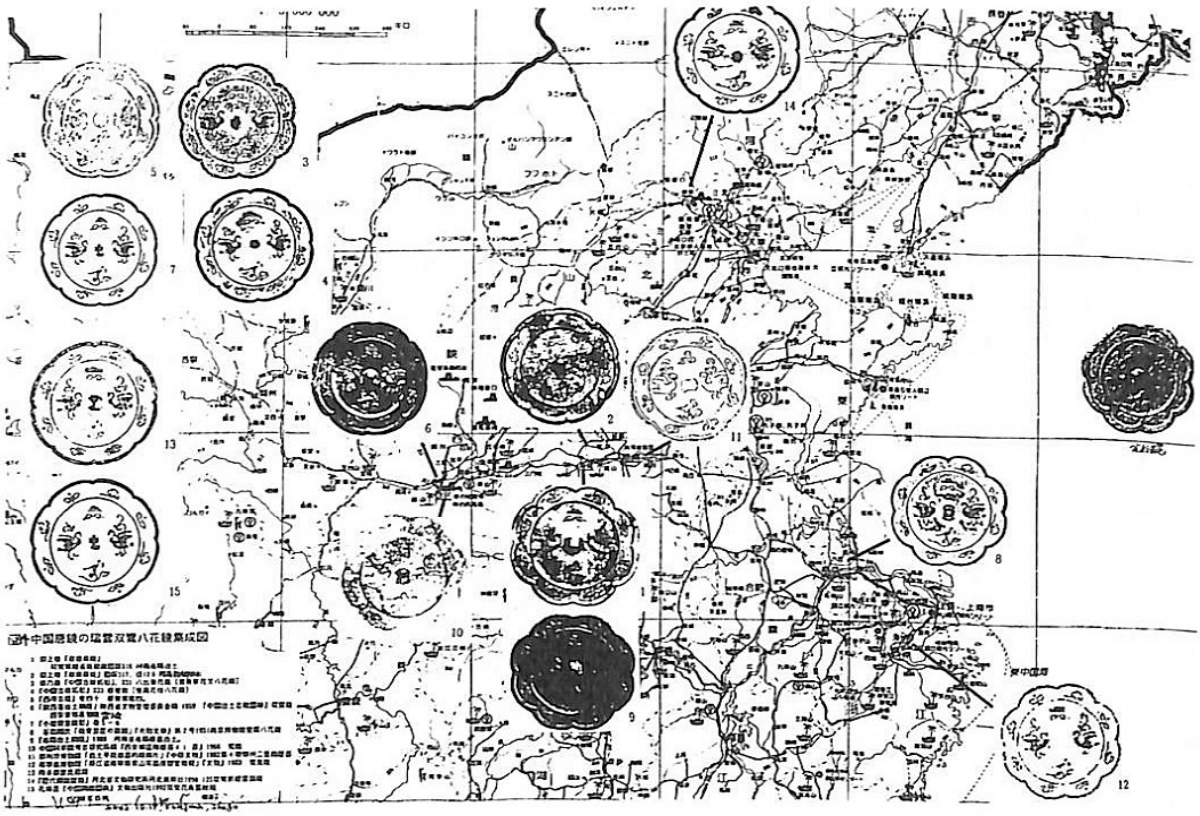


図４　中国唐鏡の瑞雲双鸞八花鏡集成図

伊能忠敬測量隊が山崎へ

西川博敏

幕末に江戸城の紅葉山文庫に保管されていた『大日本沿海輿地全図』（小図）を英国艦隊（測量艦）の司令官ワード中佐の要請により幕府の外国奉行下役荒木済三郎を通して手渡ししている。この全図を見た艦隊員たちは、その精密さと美しさに驚嘆し、本国に持ち帰っている。英国の国立海事博物館に今も保存されている。最近、佐原市の伊能忠敬記念館等へ数日の里帰りをして十一万余人もの鑑賞者があったと、その盛況を報じている。

私どもは、このたび、庄家の格別のご理解、ご厚情により庄家文書を整理し、拝読させていただいておりますと、幸運にも伊能忠敬測量隊が山崎でも測量をした文書に寄しくも出会うことに恵まれた。

ここで、この文書から二、三点を紹介し集約してみたい。

＊

庄家文書「天文方御巡廻覚日記」や「伊能忠敬測量日記」（大空社）等を見ると、宍粟郡での測量は、四日間である。その足跡を追認してみたい。

文化十年（一八一三）十一月二十五日曇天播州宍粟郡尼ケ崎領下三河村を出立し、森対馬守領土万村、小笠原信濃守領葛根村、切窓峠を経て森対馬守領青木村枝比地町から本多肥後守領分高下村字大谷、字吉藤、字皆森、字広岡、字保工、字谷、字米山を経て市場村、木谷村、加生村、門前村門前町、左に古城跡と赤松家城、山崎村へ。左に八幡宮、山崎町、西新町本町右の方に大手、本多肥後守在所高一万石。山田町、一ノ宮道追分で測量の打止め。この日の測量は街道三里十五町三十九間。七つ時（午後四時）頃山崎町着。泊り宿は、橋屋佐兵衛宅。

同二十六日曇天播州宍粟郡本多肥後守領在所の山田町追分から測量を始め、福原町、出水町、富士野町、山田村、庄能村、伊沢川仮橋九間、三津村枝観源寺、枝三津を経て三ケ月領五十波村。五十波川橋六間、字寺ケ市、小笠原領の田井村、揖保川仮橋三十三間、三ケ月領杉ヶ瀬村まで測量して昼休み。昼休みは、伝四郎宅。左の揖保川向式社遠測。与位村の式内与位神社祭神は素戔嗚尊、稲田姫命の鎮座し年号神主は一ノ宮と同じ。祭日は正月六日。前領は木ノ谷村、同じく神戸島田村、尼ケ崎領安黒村、恩田御代官所尼ケ崎領伊和村、安志領須行名村字上り立を経て一宮神社前で打止め。街道は三里一町四十二間である。宍粟郡一宮正一位伊和大明神。式内伊和座大名持御魂神社で、祭神は大己貴命、祭日は六月十五日、鎮座は人王十三代聖武天皇十三年甲申二月十日、神主は大井越前守安黒長門。そして、安志領須行名村へ八つ半時着く。泊り宿は大庄屋春名庄兵衛宅。

同二十七日曇天宍粟郡安志領須行名村を出立。無測にて三里程

戻り、山崎町の山田町、一ノ宮追分前の宿にて昼食。その後姫路道を測る。左に日蓮宗静明山青蓮寺で御朱印百石。清水口木戸は本多肥後守領の山田村、右に新宮道追分があり、これより三里、その間は、同領中広瀬村から同領舟元村、伊保川舟渡し十五間、河原幅一町半ばかり、川の中央線からは、恩田新八郎御代官所須賀村、三ケ月蟹ヶ沢村を経て小笠原信濃守在所一万石あり。安志町市中西町より右は姫路、左は戸倉道の追分。ここで打止め。一里十一町四十八間八つ時頃安志西町へ着く。泊り宿は本陣清水平右衛門宅。

同二十八日晴天安志町を出立。無測一里ばかりで播州飾西姫路領野畑村地内へ。戸倉街道から安志町へ逆測して宍粟郡安志領三森村枝ウスズク、安志町、安志川仮橋九間。右に大手門、即ち小笠原信濃守陣屋。元西町、林田道追分まで二十七間四尺。これより林田道姫路へ測る。三ケ月領長野村、尼ケ崎領東塩野村、安志川は五六間河原で水多し。同領植木野村の安志川は二十一間。同領狭戸村を経て建部領林田町内の本町で打止め。街道二里十六間。総測三里七町二十三間四尺。八つ半時林田本町に着く。泊り宿は姫路屋助大夫宅。

＊

伊能忠敬は、十七年の歳月を費やして日本全国の測量を成就し、偉大な足跡を残している。その足跡を振り返ると、第一次は蝦夷地への歩測の旅を寛政十二年（一八〇〇）四月十九日に出立。最終の第十次測量は、文化十三年（一八一六）二月三日から江戸府内を七十四日掛けての測量である。

第八次測量隊が宍粟郡へ来訪した時、本多山崎藩庁や庄屋がどのような準備や対応したか。「測量方御役人取計覚」などから当時の状況を鮮明にしてみたい。

一　測量方御役人の御本陣は、橋屋佐衛門
一　お下役宿は、橋屋佐衛門の向い座敷
一　下宿は、伊勢屋三郎右衛門と畳屋治右衛門
一　測量場は、光泉寺横町。ただし北の方は板で囲いを作る。
一　同所への見物は無用のこと
一　同所への帳元二人、町方二人、辻固め二人
一　御領分境へ帳元二人。同所への御駕籠置き場と敷物、茶の用意
一　御領分中の御先払いは郷方二人。他にほうき持ち二人
一　下役中へは、先払い二人。村切へは、組頭の出役。町方も同じ
一　御領分境へは大庄屋二人の立会い。但し着服紬類帯刀で立会う。二手に分けられた時は大庄屋一人ずつ付き添うこと
一　御通行筋の御案内は、羽織股引き姿で行う
一　郷町の用達は、御付添いが御用伺いをする
一　御道筋は念を入れて掃除をする。道橋を取り繕いする
一　木谷渡り瀬、御名渡り瀬、出石舟元船場での御通行の節は人

足を四、五人差し出すこと

一 出石船着き場では、御通行の節、高瀬舟二艘を用意すること。ただし船頭一艘につき付添い四人ずつ。御通行が夜になれば高提灯一張りずつ用意する。ただし、杭に結び付け置くこと

一 御着発や御廻りの節は、夜になれば高提灯二張りで御先立てすること

一 町外れ大年寄り一人は袴羽織帯刀の装いで出迎えること

一 町方御通行筋の町々の年寄は袴羽織にてお迎えのこと

一 町々辻固めのこと

一 御本陣亭主は、麻上下を着用し、町触れして出迎えること

一 店先に草履をつり下げないこと。股引き、足袋類も同じこと

一 御通行筋に竹材木古道具類は裏へ取入れること

一 東西木戸には、盛砂をし、御手桶二つずつ用意すること

一 御通り筋の町内は、盛砂をすること

一 御本陣は、盛砂、手桶を用意すること。向座敷道や入口も同様のこと。右の両所は、御紋付、幕内のこと

ただし、夜になれば、御本陣前に台提灯二張り路地に一張りの用意のこと

一 御本陣前町家は、屋敷を明るくし、御足軽は番所を取り繕うこと。

人足四、五人差し出すこと

一 御本陣と向屋敷には、御宿札を掛けること

右御名知っておれば、申し出ること

一 下宿に紙札をつけること

一 郷町での用達は御本陣へ相談し承ること

一 出火の時の御立退は、大雲寺のこと

ただし駆けつけ人足は三十人ばかり用意すること

一 御料理向きは、一汁三菜のこと

ただし御献立は、用達よりお伺いすること

御菓子、御酒等は、用達の者がお伺い差し上ること。

一 御宿の用意物

一 御本陣の白木三宝熨斗蚫、向座敷塗り三方も同断

一 御刀掛は、三通り

一 椀や家具は、上下とも宗和

一 夜具は、上分持参。中分紬類六人前用意のこと

下分水いらず。木綿

一 風呂は三本

一 給仕人は、六人

一 御荷物置場は、三間

一 短檠は二張

一 御紋付箱灯燈は、二つ

一 置き火燵

測量方御入用の品

・薄縁　十枚

・毛氈　二枚

・腰掛け　一間一枚板の足付け　ただし新規の二脚
・掛屋
・筵　二十枚　ただし新規
・茶煙草盆の用意
・火鉢見計らう。ただし寒気の時分は伺い差し出すこと
・薄縁裏付け　二十枚　ただし新規

一　勤め方人足
・梵天持ち　六人
・台持ち　一人
・鎖持ち　四人
・棹持ち　六人
・床机持ち　一人
・かます持ち　一人
・両掛　一人
・刀持ち　六人
・乗り物　四人
・煙草盆持ち　一人
・先払い　二人
・大四ツ割り　三尺ほどの杭を五、六本村々で用意
締め、三十一人は、この人足御逗留中詰めること
　尤も、人足を吟味のこと
ただし、着服髪月代見苦しからずようにすること

一　火の廻り町方同心
・昼夜四度二人ずつで相廻ること
・御役人方へ無礼不作法のなきように致すこと
・時の鐘は刻限を間違えないように致すこと
・時の太鼓は終夜刻限に間違えないように相廻ること

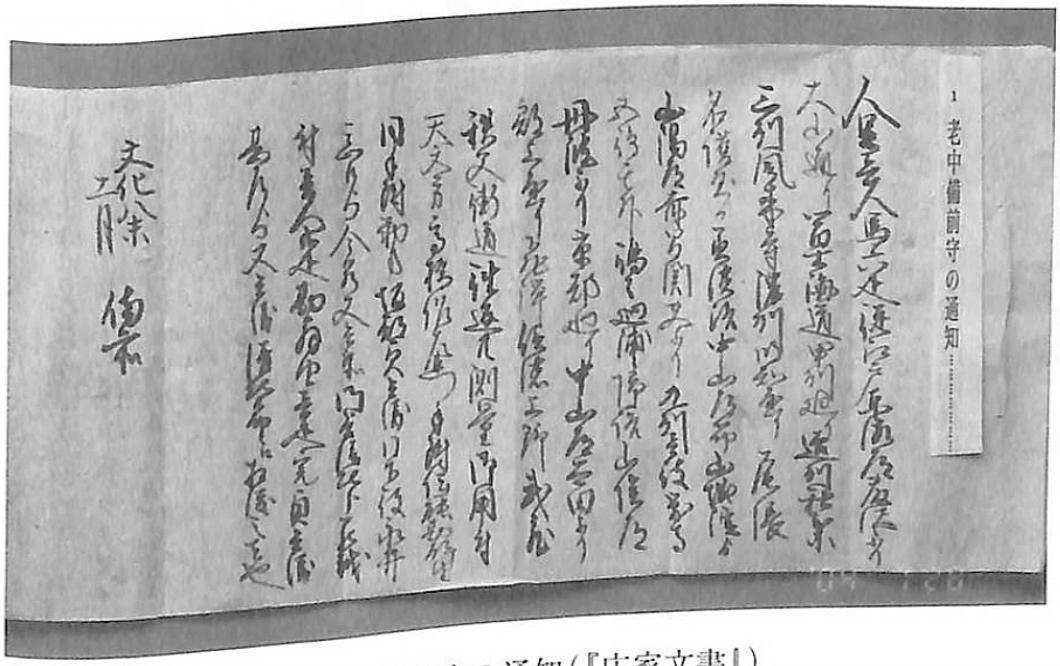
一　御通行筋の葬送、火葬は無用のこと
一　御先触れ人馬覚
一　馬七匹　から津屋勘兵衛
一　人足十二人　八百屋卯兵衛
　但し人馬宿場は、英賀屋甚十郎向店のこと
一　御本陣詰係の者、人足等は禁酒のこと
一　寺社心得のこと
一　御役人御立寄りあれば門前へ罷り出て会釈すること
一　台張り　三つ
一　高張り　四つ
一　三つ道具　一組
一　御幕　三つ
一　御宿札　二枚
一　赤合羽は測量泊り人足の者へ平人足は雨具自分持ち
一　青塗り合羽は駕人足　四人
　右の品々は両役所へ取寄せ置き、請取りに来ること
　土橋御門、熊鷹御門、中御門の御通行の筋見張りに罷り出て
　通路を差し止めのこと　見張りにて下座のこと

＊

この三点の貴重な歴史資料を透かしてみると、老中備前守からの御達しを受け、山崎藩庁や大庄屋を始め郷町の各庄屋などが全神経を集中して準備やその対応をしている。とくに、幕府の御巡見のように微細の落度もない体制を調えていることが文書の行間からにじみ出ており、その当時の情景がありありと鮮明にまぶたに浮かぶ。

怪物的な伊能忠敬、十七年間の夢をかけた伊能忠敬、隠居してから挑戦した伊能忠敬、長男忠景の死亡にも帰らず測量を続けた伊能忠敬、全図を見た外国の測量隊が驚嘆した伊能忠敬。この偉大な忠敬隊一行が宍粟郡を訪れたことをできれば、宍粟郡の小中学校の学習資料にして生かしたいものである。

文化十年天文方御巡廻日記（『庄家文書』）



老中備前守の通知（『庄家文書』）

大雲寺元禄における念仏講についての一考察

下村哲三

大雲寺は、元和五年（一六一九）に専誉上人により開基とされている。池田輝澄の寺町計画の最初の浄土宗の寺であったと思われ、松平康映時代（寛永十七年～慶安二年（一六四〇～一六四九）の城下絵図には、現在の大雲寺の位置（上寺一六九番地）に寺地が記されていて、池田数馬時代にはこの寺地は大雲寺と記入されている。

大雲寺は山号を青龍山と言い、京都東山の知恩院末寺である。ちなみに過去帳は正保元年（一六四四）より今日まで十冊現存している。

延宝七年（一六七九）に本多政貞が大和郡山より転封、山崎藩主となり歴代の本多家が浄土宗を信仰していた深い縁により、大雲寺を菩提所として定められたと考察される。

前本堂の鬼瓦の側面に延宝八年（一六八〇）の文字が刻まれていることから本多家の菩提所として本堂の工事が始まり翌年堂宇が確立され、宗教活動の拠点になっていったと想像される。

平成二年夏に新本堂建立の為、私も本堂再建委員として立ち合い前本堂を解体したが、当時の詳細をうかがわせる上棟札等はなく残念な思いをしたと同時に本尊阿弥陀仏を解体修理をしていた京都清水坂の京仏師佐川先生宅のアトリエに伺ったが仏胎内にあるはずの仏師名、住職名、世話人名等の名前も一切ででこなかったことは不思議に思えてならない。

明治後期の大雲寺（西鹿沢の榎元氏所蔵）

さて大雲寺元禄期においてどのような宗教活動が行われていたのか？寺史、過去帳を含めて調査したが、その資料はなく唯一、念仏講の名が元禄年間に見られる程度であった。

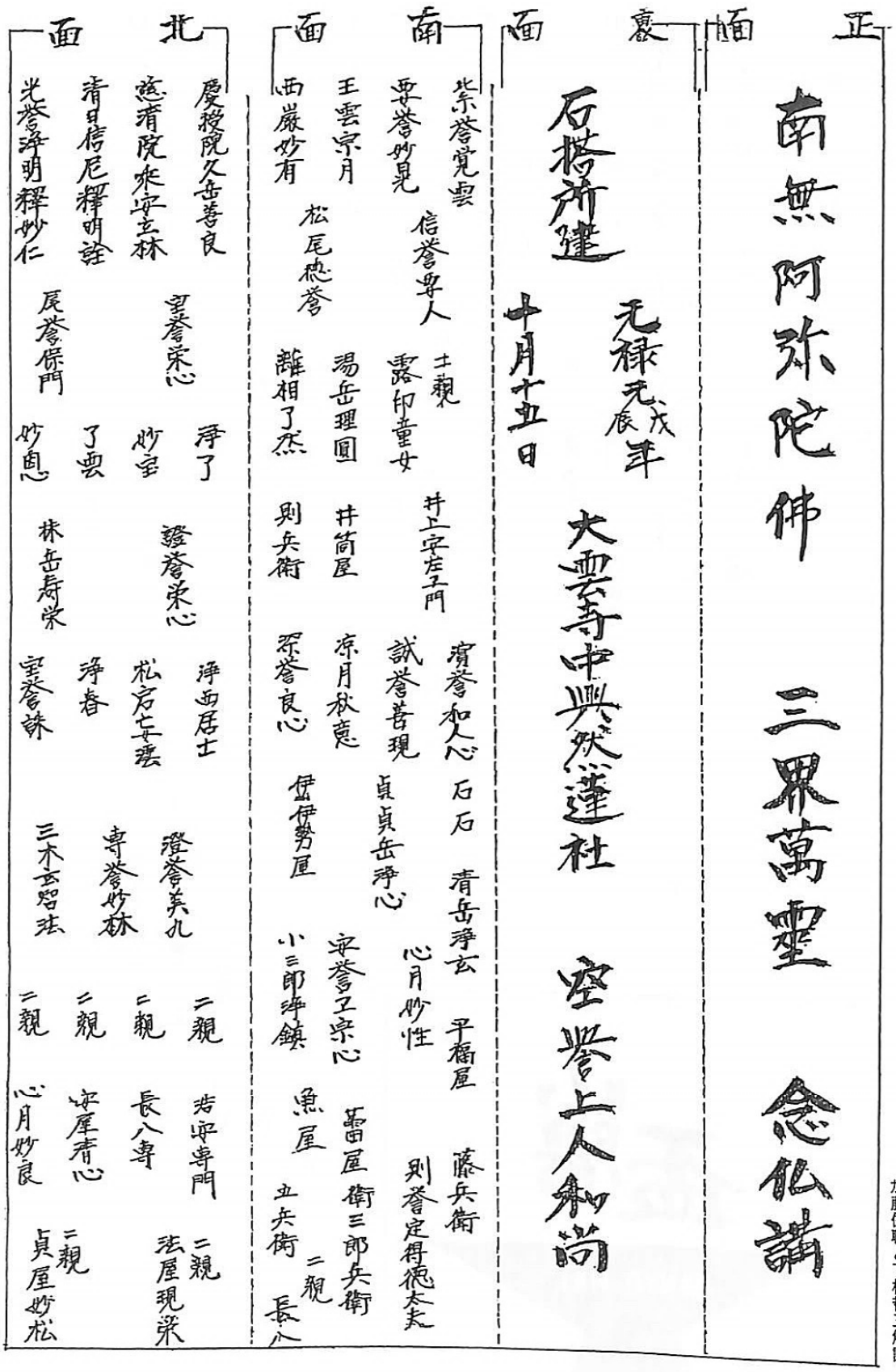
大雲寺本堂の鬼瓦（側面に延宝八年1680年）

この度、無縁塚中央に無縁霊の供養塔として、建立されていた石塔が、元禄元年に作成されたものであり、念仏講の寄進により当山第五世住職代のものであることが判明した。

（当時の供養塔の作りが手彫りで浅く石面もあらく、文字が解読できる状況ではなかったが拓本等の技術により八〇％ほど理解することができた。）

石塔正面

石塔の正面には、南無阿弥陀仏、三界萬霊、念仏講と刻まれている。大雲寺住職の説明によると三界萬霊の供養塔とは衆生の輪廻する三種の世界　※参照（欲界、色界、無色界）に偏在するすべての精霊を南無阿弥陀仏の念仏によって回向し供養するための



加藤住職と下村哲三解読

石塔であり、元禄年間にこの塔が念仏講の寄進により建立されたことは大変貴重な遺跡であるとの見解でした。

建立年月日、元禄元年（一六八七）十月十五日、建立者、大雲寺中興然蓮社空誉上人和尚となっているが、中興とは本堂を建立された功績の称号であり、空誉上人が延宝八年（一六八〇）に前本堂を建立された七年後、元禄元年（一六八七）に供養塔を立てておられる一連の流れが見てとれる。

当時、念仏講の組織は空誉上人の強化指導の賜であり、法然浄土の教えを個人個人ではなく「講」という組織の中で別時念仏を行い、想像をするに新しい本堂阿弥陀仏前にて一心に木魚をたたきながら念仏を唱える信仰は、素晴らしいものであったと思われる。その結果、講員が施主となり、先祖供養、自己修練のみならず、三界萬霊の回向を営む塔を建立するに至ったのであろう。信仰の原点をここに見る思いがする。南面、北面に刻まれている念仏講有志の施主講員は約二十名と考えられる。寛文十一年（一六七一）に檀家制とよばれるものが成立されたが講員は大雲寺檀家のみならず町内の念仏篤信者により構成されていたと思われる。

三百二十年経過した平成十六年現在、山崎町内で判明できるのは、伊勢屋（本町田村家）と平福屋（出石、下村家）の二軒のみである。

今後更に、理解できる範囲で解読に努力をしたいと切望しつつ最後にこの寄稿にあたって、三界萬霊、大雲寺歴史の助言を大雲寺住職加藤昭彦師にいただいたことに感謝の意を表したいと思う。

※生死流転する迷いの世界を三段階に分けたもので、欲界は淫欲、食欲の二欲を有するものの住むところで、この中には地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六趣（または六道）があり、欲界の天を六欲天という。

色界は先の二欲を離れたものの住むところで、ここでは物質（色）が殊妙なので色界の名がある。四禅天よりなり、これを分けると十七天となる。無色界は物質を超えた世界で、物質を厭い離れて、四無色定を修めたものが生まれるところである。

（新仏教辞典　中村元　監修より）

長水城五十波構（構の城）

春名俊夫

『宍粟郡古城記』（宇田義雄氏　中野）の一文に郡内の「構」と呼ばれた「構居跡」が十三ヶ所あるとしるされています。

五十波　宇野下総守源政頼の出城　五十波
上町　神山但馬守正明　宇野
下町　宇野内匠守行義
安積　安積左近将監盛昌（天正九年より）
庄能　広瀬七兵衛周数
中比地　二階堂豊後守兼光
宇原　志水越中守永俊
安黒　安黒右京長則
皆木　岡田伊右衛門尉長宗
高下　庄太郎左衛門尉政春
金谷　柏原三郎尉頼宗
安積　嵯峨山右衛門佐祐宗
狭戸　水田駿河守利光

となっています。

「五十波構」コノ構ハ長水城広瀬家ヨリ宇野家ニ至リテモ別ノ御殿ニシテ御主度々変リ天正ノ頃ハ政頼支城トシテ居レリ、又小林兵頭重周ハ御近習ノ役務ナレバ時々居ル事モアリ、五十波ノ支城トモ云フ又構トモ云フ。天正八年五月落城。

『日本城郭大系（第十二巻）大阪・兵庫』の一文に「構の城」五十波構は宇野氏にとって長水城の搦手の防衛拠点でもあり、また、領内支配の拠点でもあった。築かれた年代は不明であるが、宇野下総入道祐頼（政頼）の隠居所であったとかかれている。又、「紀伊続風土記」の「秀吉文書」や「信長公記」には、天正八年羽柴（豊臣）秀吉が長水城を攻めたとき宇野民部大輔祐清（長水城主）と、その父宇野政頼がこの構に籠もって戦ったが、三日間で攻め落されたため、父子は長水城に逃げ登ったと書かれている。

構は揖保川が形成した河岸段丘を谷川が削り取った結果出来た舌状段丘の先端部に築かれている。すぐ前方を揖保川が流れ、北は自然の谷川を堀とし、南も自然の谷を堀としている。

構は六十メートル×六十メートル程の正方形を示し、丘陵基部を巾十メートルの規模で堀切としてその土を土塁として使用している。

『播陽万宝知恵袋』（一七五三年作）には「南門四方土居、其上ニ並木有リ、西南ハ堀、北ハ渓水、東ハ堀跡有リ、東ノ川端ニ古ヘノ馬場ナリト言イ伝エシ所アリ、一・二町ノ間土地平坦、左右ニ並木アリ、其中ニ大木アリ今ハ奥筋ヘノ往還ノ路也、」と記されており、現状は、これとほぼ同じであるが、西南の堀跡はほとんど埋められてしまっている。東には今も幅五メートル、深さ五メートルの堀跡が存在し、構の前方直下には約七メートルの段差

をもって幅五メートル～十五メートルの規模で平坦地があり、これが『播陽万宝知恵袋』にいう馬場に相当するものと思われる。同書には「四方土居であると記されているが現在、西側の辺りの北半分に土塁が残っている。土塁は比較的規模が大きく高さ四メートル、幅八メートル、長さ四十メートルである、土塁前面は幅十メートルの堀となっている。」と記されています。

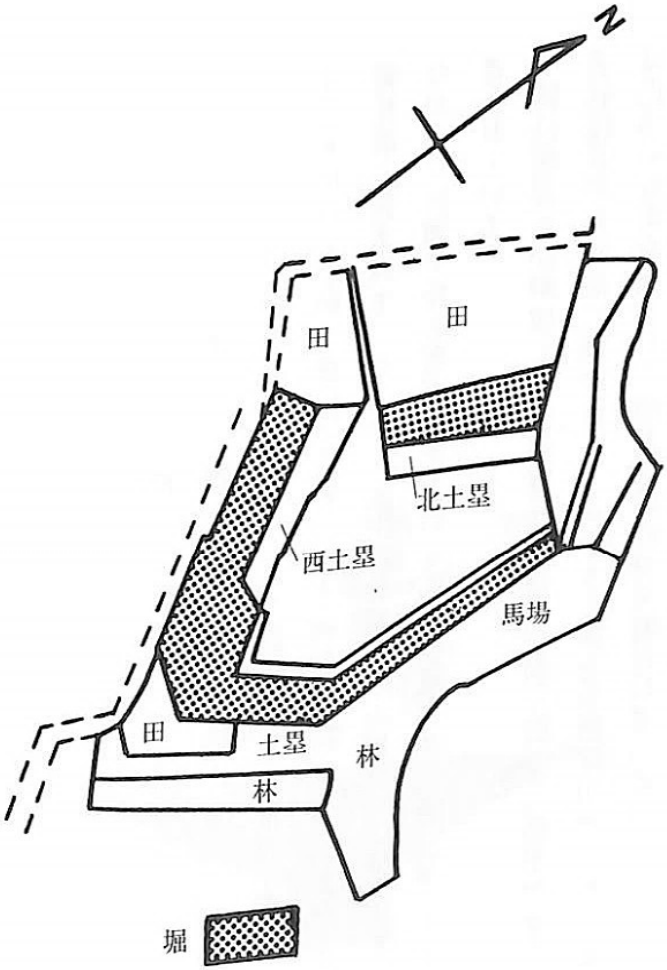
山崎町が昭和四十三年十月にこの構の内部と北土塁の一部をこわして養護老人ホームを開設。更に昭和五十一年四月「さつき園」を、堀を埋め立てて開設しました。前の「構の城」の一文はその後に書かれたものです。

以前の姿は、四方に高低差はありましたが、土塁が囲み三方に堀の跡があり、堀は田や畑になっていました。内部は土質の良くない畑となっていました。戦時中は食糧不足から芋などもつくられていましたが作柄は良くありませんでした。

構の正面入口は、北土塁の西端と西土塁の北端に石垣があり、西側は一段高くなっていて、櫓の跡と思われるものがありました。その下に鍵型の道があり城の入口のようになっていました。東の現在道路の部分は昔も削られて二メートル程度の道路になっていました。終戦後の一時期民家が建った事も有りましたがごく短い期間でした。その前の構の様子は『播陽万宝知恵袋』に書かれている状態そのままであったようにおもわれます。今に見られる昔の姿に近い部分は北側の土塁と、東南の堀跡となっています。

現在の開発では、史跡的な部分は出来る限り保存し、史跡の部分を有効に利用する方向で開発していきますが、以前はそんなことにお構いなく開発していますので原形の回復は大変な事業になりますが、長水園の跡地利用についても、現建物を撤去し、発掘調査を全面実施して、しかるべき方向で公園化を考えてほしいと思いますが、如何なものか。

明治二十五年に作られた地籍図の中から「構」の部分を写した図を附けてみました。



赤坂太郎と宝篋印塔

谷井伴夫

永禄年間（今から約四百四十年前）、播州宍粟郡石保郷五十波に長水城があり、その城主は宇野下総守政頼といい、揖東、揖西、宍粟、但馬などに約十万石を領有していました。

その一族、伊和岡城に岡城豊後守、杉ヶ瀬城に日向守祐久（今の清野）、都多村の城に宇野妥女正祐正、土万の塩山鳥子城に宇野右衛門祐光、千種谷黒土城に石原右京その子勘解由、山崎篠の丸城に長男光景、美作国小原城に三男宗貴、揖保郡林田の松山城に四男宗祐、神崎郡常屋城に五男祐光を配し播磨地方の豪族の名をなしていました。

天正八年三月中頃より羽柴秀吉との戦が始まり四月二十四日より二十六日に各諸城が落城し、鳥子城主祐光も父の政頼と共に大森にて自害いたしました。戒名は寂静院泉祐大居士です。その時西塩野村（現塩山村）にありました大福寺も焼失し、多くの城の武士や城で働いていた女中衆、又近所の村人も死んだ者と思います。当時城の付近の武家屋敷や今も呼ばれている柳町、大町、寺等の家々も被害を受けたものと思われます。鳥子城を村人たちは、今でも片城と呼び字名も小学校の北側の登校坂辺りを片城と呼んでおります。

なぜ片城と言っていたのだろうか？

鳥子城がどこに建っていたのか、私たちは学校付近を教育委員、町の職員と一緒に調査を致しました。北側の山に平地があり、そこは武士の屋敷か女中や召使の者たちの住んでいたところではないかとの事でした。それではどこが城跡か、山の上も調べたが城の建つような広い土地はなく、現在土万小学校が建っている場所より考えようがないようです。南側の赤木製麺所あたりから養鶏場のある箇所は馬場であったそうです。城の裏は秋葉山に連なる山々で今出のカーブになった道路は当時では狭くて上側は岩山、下は志文川が流れていて柵でもあって自由に通行は出来なかったと思われます。

小学校の下も今のように幅の広い道ではなく、同じように川に挟まれた道で、おまけにお城の真下でもあり、なかなか普通のものが通れるものではないはずです。村の人達がお城の全景を見ることはなく北側の大町や寺や松尾神社の方角からだけ見えたと推測すれ

贈答品・記念品・名入タオル・ギフト全般

ギフトショップ まどか

Personal Gift LOIRE ロワール円

宍粟郡山崎町中井１０５－１（ジャスコ南）
ＴＥＬ0790(62)8726
ＦＡＸ0790(62)9681

ご用命は通話無料のフリーダイヤルでどうぞ
0120 0120－338726

ば片方しか見えなかったのでカタシロと呼ぶようになったのでは……私の推測です。

さて戦ですべてが焼け尽くされ、あとには武士や働いていた女たちの死骸が数多くあったものと思えます。たとえ小さな城であったとしても武士やその家族、郎党など数百人はいたのではないでしょうか。

今でも小学校北の山の中には多くの無縁墓があり村では入ると祟りがあると木も伐りません。現在は北の登校路として山を掘り下げて通学できるようになっています。私たちが小学生頃は山の裾を迂回して通っていました。その通学路の下にも無縁墓が数個ありまして改修した時にそこから短刀が出ております。そこに今からお話しする宝篋印塔がひっそりと苔むして建っておりました。

戦が終わってたくさんの死骸が山中に転がっておりましたので、村人たちは城の北の中腹で平たいところに埋めてやりました。何ヶ月か過ぎて村の人たちは不思議なことに気がつきました。それは毎晩のように夜になると何処からともなくコン、コンというような音が朝方まで続きます。耳を澄まして聞いてみるとチーン、チーン、或いはガン、ガンとも聞こえます。お城のあった方からです。時々女のすすり泣くような声が川のせせらぎの水音と松が風に吹かれて鳴るのにまじり、夜中の事とて村の人たちは大変怖がり、戦で死んだ人の霊が毎晩あのように悲しんでいるのだと思いました。でも、誰も恐れて山に近づく事も出来ず、只恐れおののいておりました。

それでも気になるし放っておいて大変なことになっても困るので、一度山へ行ってみようと言い出すものが出てきました。何人か誘い合わせてある番そーっと音の聞こえてくる山へ近づいてみました。

山の中に小さい粗末な小屋が建っており、小屋の中では白い物が数人か数匹か、人間やら動物やらわからないけれど一生懸命に何かをやっているようでした。しばらく見ているうちにその中の大きい物が頭を上げて入口の方を向きました。なんとその顔は狸のようでした。村人たちはびっくりし、あわてて村へ逃げて帰りました。逃げ帰っても村で待っている家族や村の人にも言えず、只恐ろしい狸に化けた城の死んだ人の霊が出て何かをしているぞ、えらいこっちゃ村人が祟られると困ると震えておりました。

それが毎日、毎晩となく続きました。

そのうち勇気のある若者が一つ俺がその正体を見てやろうとあ

たりを窺っておりますと、夜が明け、辺りが明るくなると小屋で動いていたものが次々と南の山（秋葉山）の方へ帰っていくので後をつけてみると、中腹に庵があってその中に消えてゆきました。そこは今も神宮寺と呼ぶ寺があったところです。

正体は人間であることが分かりましたのでこれで一安心でしたが今度はあの場所で何をしておったのかと心配になりだしました。ついでに小屋の中も調べてやろうと小屋の中に入ってみると、なんとたくさんの墓石が刻んでありました。

それは鳥子城の武士の生き残りの者か、死んだ人の縁者か分からないが、白衣を着て狸の面をつけて、役人に見つからないように夜になるのを待って墓を作っておったのでした。それを知った村人たちは可哀相になり小屋へ食べ物や生活に必要な品物を持っていくようになったそうです。しかし役人に知れると一生懸命に死者を葬う為に働いている人がつかまってしまうので、狐や狸が出ているのだということでその人たちを守ってやりました。

墓石を造っていた人達の先達は太郎坊と名のっていたので、あれは赤坂太郎だと村のものは呼ぶようになったそうです。（今でも学校の裏山にはたくさんの狐か狸の穴があります。）

何ヶ月か後、立派な宝篋印塔と五輪塔が出来上がりまして供養を済ませて太郎坊たち一行は村の人たちにお礼を述べ、どこかへ去っていきました。

その宝篋印塔は昭和二十年代に心無い人に盗掘され荒らされましたが、塩山老人会の会員により一ヶ所に集め宝篋印塔を中心に他の五輪塔などをお祀りし、毎年三回程清掃や草刈り作業奉仕をしております。

旅行・観劇・航空券
すぐお応えいたします
神姫観光
〒671-2576 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68
（神姫バス山崎待合所内）
TEL(0790)62－7588
FAX(0790)62－7589

長水城の伝説七不思議

中川真里

天正八年（一五八〇）五月難攻不落の天嶮を頼みとして、秀吉軍に抗した長水城主宇野下総守政頼はあえなく落城し、都多谷を北上して千種まで落ちたが、武運尽きたるを告げ一族果ててしまった。長水落城後四百年以上経った今に残る伝説として長水城の七不思議を紹介する。

第一話　殿様と鶯

長水山、標高五八四メートル、揖保川に架かる宍粟橋の辺りより北の方宍粟の山々を望めば、聳り立つ秀麗長水の山容を眺めることができる。

登山道、東は五十波口にあり、西は伊水小学校南より十八丁、電柱三十三本が頂上をめざして建ち、東西共中腹に年中水の涸れることのない一条の水、高さ五メートル余りの滝があり、東西共に「一の木戸」「二の木戸」と中世山城の跡をとどめている。

城主宇野下総守政頼公は文武の道に優れ、心優しい方にて日頃小鳥を飼い、わけても鶯を大切に飼っておられた。時に戦況の不利なるを見て、鶯や小鳥すべてを長水山中に放されたという。鶯は年々美しい声で鳴き、遠く近く有名となった。

伊水小学校からの登山道の途中に「鶯の滝」がある。その近辺でよく鶯が鳴いたという。鶯の鳴き声で「ケチョ、ケチョ、ケチョ……」があるが、これを鶯の谷渡りと云い、続けて長く鳴くのが一番良い鳴き方といわれている。

時移り昭和六十年ごろ、日本鶯愛好会の人たちが大阪の河内で「鶯の鳴き競べ」をされたとき、山崎町内の理容師さんも、長水城主以来連綿と鳴き続ける「長水の鶯」を携えて参加されて、沢山の参加の鶯の中で「長水の鶯」が、一番の美声ということに決定し「優勝」。一躍有名となったとのこと。

第二話　長水城の宝物

長水城、床の置物として二羽の金の鶏があり、落城の時、城の北側の井戸に投げ入れたと伝えられ、また「朝日、夕日に照り輝く、三葉うつ木（空木・卯木）の下にあり」とも伝えられ、一月一日の朝、七時五分「コケコウロ」と三回鳴くといわれている。

山頂近く炭焼く人の炭焼小屋に泊り、或はまた山の芋掘りの人、頬かぶり小屋（田畑出作りの際、宿泊用の簡単な小屋）に泊り、捜すも声は聞けども、未だ金の鶏は見つからずという。

第三話　矢竹

矢竹は矢に用いる竹で節間が長く、節が低い。築城の当時、長

水山の近辺には矢竹がなく、九州筑後国高良大社の近くの山にあるとの情報を得て矢竹とりの忍者を出したという。

第一回目は、行ったきり帰らず不明となる。

第二回目は、警戒厳重にして取り得ず、逃げ帰る。

第三回目、ようやくにして矢竹の根を掘り採って長水に持ち帰り、頂上より東側二丁ほど降りた所に植える。やがて根付きてよく繁茂し、平成の今も辺り一面の竹藪となっている。

矢竹は戦闘用のほか、矢文にも用いた。長水城の北方真下に大谷の村落があり、大谷の里は代々の城主の隠居所であった。村の中央、小高い丘の上に、須賀神社が鎮座し、神社のすぐ下の方に「御堂」があり、大谷の人々は「堂の仏さん」と呼んでいる。お堂の前方に的石（矢の石）高さ約一メートルほどの石が立っている。長水城より矢を射る時の的とした石で、遠矢を競ったと伝えられている。

竹のつく「姓」や竹の「紋」も多いこと、また、大谷別名を「竹の内」と言うことを考え合わせると、矢竹とつながる想いがふくらむ。

呉服とジュエリー
とくさや
本店　本町（さつき通り）62-1680
咲ランド３Ｆ呉服のとくさや　63-0568
〃　２Ｆジュエリーとくさや　63-0557

第四話　古井戸

兵庫県第一の高山、氷ノ山の頂上近くにも湿原があり、水が湧き出ている。標高五八四メートルの長水山の山頂付近にも、城兵を養うだけの水が出ていた。水の出ることをよく知っていたのである。

現在も勿論、山の峯の当時の井戸により、山頂の長水山信徳寺で生活する人や、また日々の参詣者に接待する必要な水に事欠かない。

寺では屋根からの雨水も大切に溜め、近くの野菜畑、花畑に利用している。

古井戸の在処

一、水を一番多く湛え、水の強い井戸は、東側の登山林道を約三百五十メートル下った所にあり、清らかな水である。井戸の近くには、白龍王、八大龍王、熊野大権現を奉斎する。

二、次の井戸も、同じく東側の登山林道、約二百メートル下った所にあり、清らかな水を湛え、寺ではこの井戸水をよく使っている。

三、次の井戸は、「城の西側」上牧谷自治会所有林の上にあり、頂上からは約二百メートル下った所にあり、清らかな水を湛え井戸の近くには、七面大岩権現を奉斎している。頂上より井戸への山道は険しい。

四、次の井戸は、城の南の登山道、頂上より百メートル余り下った所にあり、現在は水が涸れている。

五、次の井戸は城本丸、現在長水山信徳寺のある城の石垣の下、宿坊の側、溜井戸で屋根からの雨水を受けており、また何処からともなく絶えず水滴がぽつりぽつりと落ち徐々ながら澄んだ水を溜めている。

第五話　雀　蜂

長水城本丸のうち、一段と高い場所に、現在は不動明王と三剣大明神を奉斎している。

長水山信徳寺開山の祖、渡辺日妙師は、世の平和、国家安泰隆昌、更には長水合戦戦死者の慰霊を願い、城主宇野家一族主従、先祖赤松家一族主従、敵秀吉方戦死者一同を三剣大明神として奉斎している。

日妙師が、敵味方にかかわらず慰霊されるまでは、山城に巣くう雀蜂が、土地の人でも敵秀吉に味方した子孫の者はことごとく襲った。登山道が通じた後も、敵方の者は難に合った人が多い。

長水城代々の家老後裔、渡辺日妙師、先祖の念願城再興、開山のため荒れはてた道なき山を登られた時、何処ならともなく数匹の大きな蜂があらわれ、上になり下になりしつつ道案内をしたという。

第六話　野菊（懸崖の菊）

城主政頼公は、自然を愛し、花を愛す。琵琶歌の一節にも「嗚呼文明以来百四年、月雪花に恵まれし、長き平和の長水城」と歌われたごとく自然に恵まれ、沢山の菊を作っていた。

平成の御代の今、長水山へ登る道々に野菊ではくて、中形の「懸崖」に作られる花を、あちこちに見かける。

菊人形で有名な大阪の枚方市で「長水」と云う名の懸崖が出品され入賞した。これは大阪の今里から、長水山信徳寺に参籠に来ていた人が、山より苗を持ち帰り、育てて出品した菊が入賞した。菊は病気にも強く、作りやすく、育てやすいとのことである。

琵琶歌　長水城

長き平和の長水城　槿花一朝の露と消ゆ
おもかげ残る石垣に　惨風秋雨時移り
星は変われど年毎に　緑葉そよぐ初夏の
頃ともなればそぞろにも
訪ぬる人の袖濡らす
五月雨雲の絶え間洩る
月光淡くさす夕
つはものどもの霊の声
空に上りて天翔ける

一声高きほととぎす
啼く音や哀れときかざらん
啼く音やあはれときかざらん

第七話　お　灸

虚子歳時記の『寒灸』に、「寒中を選んで灸を据えることである。古くから寒の灸は特によく効くとされて広く行はれをる」とある。

また松尾芭蕉の『おくのほそ道』に「春立てる霞の空に、白河の関越えむと……三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかかりて」とある。

また『家庭に於ける実際的看護の秘訣』という書物にも、名灸の秘伝記事があり、お灸を賞賛している。お灸は古来より漢方療法にて、別ても「長水のお灸はよく効いた」といわれている。現在は行われていないが……。

当時のお灸のすえ方

（一）腰の四ヶ所にすえ、終わって筋を切る。一日に二回、七日から十四日間、即ち一週間か二週間くらいの間すべて終わったらお灸用の膏薬をはり、膿を吸い出す。主として（一）の灸で他に、

（二）足の三里の灸
（三）腕の三里の灸
（四）背中の天柱（身柱のちりげ）の灸があった。昔長水の灸は有名で、近くの人、遠くの人健康になり、お陰を受けた人が多いという。

以上

朧夜や古城長水七不思議　まさと

外科・内科
山中医院
院長　山中陽一
山崎町西町・TEL62 0036

蚕繭紙の寺（大雄院）をたずねて

春名俊夫

五月九日、旅行には生憎の小雨が降る天気になりました。今回は参加者がいつもより少なく三十人で、午前八時山崎を発車したバスは悪天候の中、途中休憩をとりながら渋滞もなく進み、車中は、森本会長の挨拶や、今回所用のため不参加の織金研修部長さんが車内研修にと作って下さった、ビデオを見ながら京都に向かいました。

計画通り最初妙心寺派塔頭、大雄院に向かいバスは、妙心寺の駐車場に入りました。駐車場に寺よりのお迎えの方が出ておられて近くの広場で妙心寺の説明をうけて、雨に濡れた塔頭への石畳の道を進む、広い境内を相当歩いてやっと到着しました。

ここで妙心寺について少しふれておきます。

妙心寺は京都市右京区花園妙心寺町にあります。臨済宗妙心寺派の大本山で、山号は正法山です。寺の土地はもと花園法皇の離宮で、法皇の発願により建武四年（一三三七）現在地に創建されました。花園法皇があつく帰依されていた大徳寺の開山宗峰妙超（大燈国師）に開山のお願いをされましたが国師が病床にありましたので其の高弟の関山慧玄が開山となりました。

寺は第六世拙堂宗朴のとき、足利義満の怒りをかって、寺地・寺産を没収され寺号も龍雲寺と改めさせられました。永享四年（一四三二）に返され、その後細川勝元の外護を受けて復興。応仁の乱で全山灰燼に帰しました。時の住持雪江宗深は寺勢の再興をはかり四人の弟子による四派四本庵による妙心寺の運営体制の基礎を確立しました。現在燈頭は四十六、末寺院は全国三千四百個寺、国宝の梵鐘や墨跡があり、法堂を初めとして重要伽藍は重要文化財に指定されています。花園大学・高校・幼稚園などもあります。

話を元に戻し大雄院に到着すると特別公開の為に、仮説の入場門が設けてあって、丁寧な出迎えを受け庭が一望に出来る、廊下に案内され大雄院の由緒について話を聞きました。龍野城主石河紀伊守光元（慶長三年＝一五八九、美濃鏡山城より移封五万三千石・現在の霞城町に城を移した二年後関ヶ原合戦で群小諸藩は一掃され、池田輝政の所領となる）の長子石河市正光忠（太郎八、尾張藩）が父の菩提所として創建した寺で石河家本流の御位牌所として現在に至っています。

客殿、書院、庫裏、表門が京都府の指定・登録文化財となっています。客殿の襖絵は柴田是真（江戸時代末期から明治初期にかけて、活躍した著名な蒔絵師）の稚松図・山水画・瀧猿図・唐人物図など多くの襖絵の説明を聞く。柴田氏は国内外に名をしられ特に外国での評価が高い人のようでした。

蚕繭紙

大雄院の住職石河正久師は、三十余年の歳月をかけて研究、努

力された結果、繭は大昔からピーナツの形だったが、交配に交配を重ね、平らな所に置くと平面状に糸を吐く蚕に改良され、純品化させた変異種（石河蚕）と呼び、名刺位だと一匹、色紙の大きさの時は十五匹くらい置くと三日間で蚕繭紙ができあがります。養蚕発祥の地、中国でもなかった平面繭です。

この蚕繭紙に、各地の名刹の貫首や高僧・有名人の揮毫を拝見することができました。

見学が終わる頃には、雨も上がり寺の境内を見学しながら駐車場へと三々五々集合トイレなどを済ませて出発、時間が少し早くなりましたが、昼食の場所の嵐山レストランに行き、昼食、嵐山の散策の時間を多く取ることにしました。昼食後は、天竜寺（臨済宗天竜寺派の大本山京都五山の一位、足利尊氏の創建・開山は夢窓疎石）に行かれた方が多いようでしたが、集合時間には土産物を手にしながら全員集合で次の参拝所、藤森神社へと、京の町を南下し、京都南インターを越して左折国道二十四号線に出て、墨染通りを進み京阪墨染駅付近から狭い道を切り返しながら進み、やっと藤森神社の大鳥居前に到着、五月五日の藤森祭の後片付けをされている参道（駈馬神事の道）を進んで参拝する。

この宮は今から約一八〇〇年前に、神功皇后によって創建された皇室との縁も深く「武神」を祀る古社です。本殿（重文）は正徳二年中御門天皇から賜ったものとされています。本殿の背後には、東に八幡社本殿、西に大将軍社社殿（共に重文）があり足利義教の造営で気品の有る建物です。特に菖蒲の節句の発祥の神社としても知られています。六月には三五〇〇本の紫陽花が咲きお祭があるそうです。

お参りを済ませた私たちのバスは、又狭い道を城南宮へと進め国道一号線を少し走り、城南宮の駐車場へ入りました。この宮は都の南に鎮座し、国を護る城南明神として崇められ、平安末期白川上皇が城南離宮を造営し院政を執られたので賑わいましたが、承久の変・応仁の乱に至り全く荒廃してしまいました。しかし、方除け信仰は後世に受け継がれ江戸時代から皇室とのかかわりも出来、社号の変遷等もありましたが昭和四十年から従来の社号「城南宮」に復し方除けの神として信仰を集めています。

私たち一行は宮の拝殿まで進み、その後は案内の方に導かれて、神苑へ初めに「春の山」に入り、本殿の裏手に回り、「平安の庭」春と秋の二回行われる王朝の優雅な遊び、曲水の宴はこの庭で催されます。つぎに「桃山の庭」「室町の庭」と通り正面鳥居の前にでて駐車場へ、約一時間の行程でした。出店で思い思いに京漬け物を買われる方もあり、全員集合で一路山崎へ、帰路は途中赤松サービスエリアで休憩し山崎町には予定時間より早く到着しました。

参加して頂きました皆さん、御苦労様でした。

正誤表

前号「一〇三号」の地域史随想ー北播磨の紙漉き業ーにおいてミスを発見しましたので、訂正しお詫び申し上げます。

●七頁上一九行

誤　文明二（一四七〇）→正　応仁二（一四六八）

●七頁上二〇行

誤　折紙代百疋→正　折紙代百疋納、都多代官職之儀也

●八頁上八～一二行

誤　文明二年の折紙～要求の応じられ、→正　応仁二年は代官職任命の謝礼金であった。

要するに応仁二年九月十四日の記事の後半部を見落としていたのでミスを犯しました。

宇野正碆

心のゆとりのおてつだい
安井書店
YASUI BOOKS
本　　店　TEL(0790)62-0700
さつき通り　FAX(0790)62-2117
ブックランド店　TEL(0790)64-2051
山崎町中井　FAX(0790)64-2052